

不全型脊髄損傷は、損傷高位と重症度により機能予後が大きく異なる。多様な症状を呈するためゴール設定に難渋し、リハビリテーションが長期化しやすいという問題も持っている。そのため、適切な評価と病態理解に基づいた介入計画が重要となる。本特集では、不全型脊髄損傷の疫学と病態を理解し、不全型脊髄損傷に対する現在の理学療法のありかたを整理する。

■不全型脊髄損傷者の疫学と病態（古澤一成，他論文）

全国脊髄損傷データベースの過去 10 年間のデータを分析し、脊髄損傷の“Japanese problem”ともいえる、高齢者の受傷と不全型脊髄損傷の増加、重度化の傾向について、その詳細を示した。さらに、不全型脊髄損傷について、運動機能や日常生活動作の変化、転帰などのリハビリテーション治療結果の特徴をまとめた。

■不全型脊髄損傷の特徴と理学療法（武田正則，他論文）

不全型脊髄損傷は、中高年を中心に増加傾向にある。特に中心型損傷が多くみられるが、全体的には高齢化と重症化が進んでいる。脊髄損傷は専門の病院に多くみられるが、不全型脊髄損傷は一般病院にも多くみられ始めており、専門的な知識と技術が必要とされている。本論では、不全型脊髄損傷の特徴と理学療法について臨床の立場から最近の傾向を述べる。

■不全型脊髄損傷者の歩行再建と理学療法（藤縄光留，他論文）

不全型脊髄損傷者は完全型とは違い、体幹や下肢機能の改善が期待でき、実用的な歩行を獲得する可能性が高い。機能障害別による代表的な歩行障害を挙げ、歩行再建に必要な運動能力を提示する。特に、体幹内部や股関節の運動によるバランス制御、および下肢の支持能力が重要である。即介入に役立つ動作分析場面を提示し、評価の視点や運動の質的な介入法、および機能改善効果を上げるための器具・器械を利用した量的な介入法を紹介する。

■不全型脊髄損傷に伴う痛み・異常感覚と理学療法（栗田英明，他論文）

脊髄損傷者における疼痛はリハビリテーションの進行を阻害するだけでなく、日常生活動作や QOL を低下させ、さらに心理的・精神的ストレスとなり、患者にとっては大きな問題となる。本稿では、不全型脊髄損傷者に限らず脊髄損傷に合併する痛みおよび異常感覚について、その発生頻度・機序を整理するとともに、理学療法で行うべき評価、治療に関する現状について概説する。

■不全型脊髄損傷者の在宅生活支援（肥塚二美子論文）

不全型脊髄損傷者の障害像は受傷タイプにより様々であり、筋のアンバランスや痙縮、疼痛、しびれなどにより一層複雑な障害となりやすい。これらの予防や改善を行っていく必要がある。また、筋の回復が認められ、機能回復のリハビリテーションを望むことがあるが、的確な評価を行い、福祉機器や補装具などを活用して生活支援を行っていく必要があると考える。

とびらページの書道作品について

「無心」

解説：なにごとにも深く考え過ぎては、行動できません。私は 2008 年 4 月末から 20 日間ばかり、機会があつて個展をしました。したい時に、したいようにやる。迷わずできる時、これが無心の境地なのかなと思います。